

文学部

I	教育水準	教育 1-2
II	質の向上度	教育 1-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、学部内に人文学科を置いて 6 系を配置し、学部の教育目的追求に必要な領域にわたる専修を設けており、大学設置基準に定める数を満たす専任教員を研究科との兼任で配置して教育に当たっているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、学部としての性質上必要な少人数教育を追求し、学生の意見を取り入れたカリキュラムの改善も行っている。学生による授業評価の実施が遅れていることは問題であるが、系共通科目から授業評価の実施を始めているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、文学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、文学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、入学時に専修を決定することなく、前期 2 年間は全学共通科目の履修に重点を置いている。別添資料の共通科目シラバスから見る限り一部の共通科目の内容が相当専門に傾斜しているとの懸念があるものの、専門教育を受ける以前に

幅広い教養を備えさせることを目的として教育課程を編成している。専修への分属に当たっては、入学時、1年次、2年次それぞれの段階でガイダンスを行うとともに、学生の希望が尊重される体制をとっている。また専門科目は、教員の研究活動を反映させ、多様な形で教授されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、学生からの要請に対して、常設の第1委員会が対応しており、学生自治会（学友会）との間で交渉の機会をもつなどして、要望のうち実現できるものへの対処を行っている。外国の大学での修得単位の処理を含め、学生の単位修得に関する便宜をはかっている。社会からの要請に関しては、当該学部の教育・研究の内容を社会に還元していくための工夫が十分であるとはいえないものの、学士入学や聴講生制度を通じて相応の対応をとっているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、文学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、文学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、少人数教育を基本としつつ、多様な授業形態がとられている。必ずしも詳細なシラバスといえないものの、各授業に関する紹介を作成し学生に配付されている。また教室へのAV機器の配置によって、視聴覚教育への対応体制もとられているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、各専修の研究室に学生の自習を助けるための機器等が置かれ、学部図書館も整備されている。各研究室で大学院学生が中心となる形での読書会・研究会活動を展開しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、文学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、文学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、4 年間で卒業しない学生が毎年 3 割程度いることは望ましい状況とはいえないが、5 年間で 9 割強が課程を修了している。卒業論文については、E 評価となっている論文が、多い年で 8 % にのぼることは問題であるが、おおむね水準に達している。また、学芸員や司書の資格を取得する学生も多いなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、少人数形式の授業に関する学生の意見聴取は各専修・教員単位で実施される一方、講義に関しては、平成 19 年度からアンケート調査方式を導入しており、おおむね良好な結果が得られていることなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、文学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、文学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を下回る

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、卒業生の就職・進学状況はおおむね良好であり、就職先は当該学部の教育内容と関連するところが多いなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、教員個人と関係者の接触が日常的に行われているとはいえ、卒業生や卒業生の受入れ先の関係者の当該学部の教育に関する意見を本格的に聞く具体的な試みを、卒業生を対象とする平成 14 年度のアンケート以外、これまで行っていない。提出された現況調査表の内容では、文学部が想定している関係者の期待される水準にあるとは言えないことから、期待される水準を下回ると判断される。

以上の点について、文学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、文学部が想定している関係者の「期待される水準を下回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。なお、判断理由については、以下のとおり変更する。

[判断理由]

「関係者からの評価」については、平成 20 年度より卒業生に対するアンケートを実施し、その内容を公開しているが、就職先等の関係者からのアンケートの実施は同窓会等の一部にとどまり、文学部として組織的に関係者からの聴取がなされていないことから、期待される水準を下回ると判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が 2 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。